

機関番号：32702
 研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2008～2010
 課題番号：20520554
 研究課題名（和文）小学校英語活動の長期に渡る観察研究：児童と大学生サポーターの学習過程
 研究課題名（英文） Longitudinal study of elementary school English Activities: Learning processes of students and university student supporters
 研究代表者
 細田由利 (HOSODA YURI)
 神奈川大学・外国語学部・准教授
 研究者番号：70349124

研究成果の概要（和文）：本研究は、平成 20 年度～平成 22 年度科学研究費補助を受けて、横浜市内の某公立小学校の英語活動を 5 学期間に渡って観察した。同小学校では英語活動導入直後から地域の大学で英語教育を学ぶ大学生約 10 名を英語活動の助手（英語活動サポーター）として活用しており、この研究では、初めて英語活動にサポーターとして参加する教員希望の大学生が 5 学期間の中にいかにして英語活動という文化に馴染んだか、「教える」ということを学ぶのかを描写した。また、英語活動の中で 5 学期を通じて教師陣と児童がどのような英語によるやりとりを行っていったのかも観察研究を通して観察研究した。

研究成果の概要（英文）：This observational study investigated English Activities classes at a public elementary school in Yokohama city for approximately five semesters. The result of the study revealed learning processes of Japanese university students, majoring English, who volunteered to participate in the classes as English Activities supporters. This study also examined the detail of question-answer sequences between teachers and students in the classes.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：児童英語教育、会話分析

科研費の分科・細目：言語学、外国語教育

キーワード：早期英語教育、会話分析、社会文化論、教員養成

1. 研究開始当初の背景

平成 14 年度より公立小学校にて 3 年生以上を対象として「総合的学習の時間」を用いて国際理解教育の一環として外国語を教えることが可能になってから、英語活動を実施

する公立小学校は年々増加し、平成 18 年度には全国で 95.8% の公立小学校が何らかの英語活動を行うようになった（文部科学省、2007、

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/19/0

3/07030811/001.htm).

平成 16 年度～平成 18 年度にかけて、本研究の研究代表者と研究分担者は「全国公立小学校における英会話活動の実情観察研究」

(基盤研究 C、課題番号 16520359) を行い、全国 10 地域 (北海道、東北、北陸、関東、中部、東海、関西、中国、四国、九州) の公立小学校の中から無作為抽出で 12 小学校、15 クラスを選択して英語活動の現場を訪れ観察研究を試みた。その結果、英語活動の実施方法 (カリキュラムデザイン、カリキュラム作成者、英語活動担当教員、実施頻度、実施学年など) は地域、学校により様々であることがわかった。特に注目したのは日本人教員の英語活動における役割である。日本人学級担任は外国人指導助手 (ALT) とのティームティーチングで様々な重要な役割を持つだけでなく、ALT の派遣頻度が少ない地域においては単独で授業を行うことも多いことがわかった。しかしながら、現在公立小学校においては、英語を専門とする教諭が極めて少ないため、学級担任が単独授業を行うためには数多くの困難に直面している様子が見えられた。したがって将来的に英語活動を必修化するためには数多くの優れた小学校英語教員の養成が必須であることが示唆された。また、英語活動の頻度の多い学校では、英語活動に積極的に参加して英語を「学ぼう」という意欲のある児童達の姿が多くみられた。

2. 研究の目的

今回の研究では次のようなことを目的とした。

(1) 初めて英語活動にサポーターとして参加する大学生が 5 学期の間にかに英語活動という文化に慣れ親しんでいくのか、英語を教えるということをどのようにして学

んでいくのか。

(2) 5 学期にわたって児童が英語活動における教室相互行為にいかにして参加していくのか。

3. 研究の方法

<研究手順>

(1) 5 学期に渡って横浜市の某公立小学校の英語活動のクラスをビデオ録画・オーディオ録音した。

(2) オーディオ録音・ビデオ録画されたデータを観察し詳細に渡って文字化した。

(3) 文字化されたデータを会話分析の手法を用いて分析した。また必要に応じて、社会文化論及び第二言語習得論の立場からもデータ分析した。

<データ>

今回集めた録音録画データのうち文字化をして詳細に渡って会話分析したのは総計 22 クラスである。それぞれのクラスには日本人クラス担任教諭、英語を得意とする外国人指導助手 (イタリア人教員)、20 名から 30 名程度の児童、及び英語教育サポーターを勤める大学生が数名参加していた。研究期間を通じて英語活動に参加した大学生は総計 10 数名である。このうち研究期間を通じて定期的に英語活動に参加した数名の大学生に特に焦点をあてて分析を行なった。

4. 研究成果

本研究期間には主に下記 2 つの研究を行なった。(1) は英語教育サポーターの成長に関する研究、(2) は児童と教員の英語活動におけるやりとりに関する研究である。

(1) 英語教育サポーターの成長に関する研究：

英語教育サポーターとして活動する大学

生のうち定期的に英語活動に参加した2名に焦点をあてて観察した。その結果、彼等が19ヶ月間の間にいかにして教室相互行為の慣行を身につけ、教師としてのアイデンティティを構築していったかを検証することができた。この研究では19ヶ月間のビデオ録画データを文字化した後に、大学生英語教育サポーター2名の教室相互行為を詳細に渡って会話分析した。分析の結果、19ヶ月間の間に児童の発話に対する口頭評価(assessment)の仕方とおよび児童への口頭指示(directive)の仕方において2名の英語教育サポーターの成長がみられた。さらに、教室におけるスペース取りについても変化がみられた。観察期間の初期にはサポーター達は教室の隅に立ち、外国語指導助手(ALT)又は学級担任教諭に呼ばれた時のみ教壇の中央又は教室の中心に立ったが、ALTや学級担任教諭に指示されたことを終えるとすぐにまた教室の隅にもどっており、大抵の場合「外部者のスペース」とも言えるスペースにとどまっていた。しかしながら、観察期間が経過するにつれて2名とも常にいわゆる「教師のスペース」、つまり教壇の中央又は教室の中央に立つようになった。また、教室でのやりとりを学んでいくと共に、教師としてのアイデンティティも彼らの相互行為活動の中に垣間見られるようになった。本研究を通じて現場での教育実習の有効性を示すと共に英語教育サポーターがその教育現場で徐々に駆け出しのサポーターから一人前の教師のようになっていく様子を描写することができた。

(2) 児童と教員の英語活動におけるやりとりに関する研究：

今回のデータを用いて英語活動における教師の質問に対する児童の返答を検証し、教

育場面における質問と応答の連鎖に関わる2つの優先組織(「相互行為の前進」および「質問に答えるように選択された者による応答」)について考察した。分析したデータは上記に示した通り、5学期間にビデオ録画した英語活動の相互行為である。また必要に応じて前回の科学研究費補助金研究(基盤研究(C)課題番号16520359)の際に使用したデータも参照した。今回のデータの分析ではこの種の教育現場における「選択された者が応答する」という優先性への一貫した志向が見られた。この優先性への志向はすべての相互行為参加者の行為に表れていた。教師は自分が質問を向けた児童による返答が得られないと様々な方法(質問の繰り返し、ヒント等)でその児童からの返答を追及し、日本人担任教員、英語教育サポーター、および選択された児童以外の児童は選択された児童の返答が遅れるとオフレコで答のヒントや答そのものを選択された児童にささやくという行為を通じて「会話を前進させる」ことを促進するとともに「選択された者による応答」への志向を示した。たとえどんなに返答に時間がかかろうと、またどんなに多くのオフレコでの手助けが必要であったとしても、返答するように指名された児童が実際に返答を行うまで相互行為参加者全員が待ち続けることによっても「選択された者による応答」への志向を示した。更にこの志向は多くのオフレコの手助けを受けた末に返答した児童をも拍手喝采をして褒め称えるという行為によって非常に強く示された。それに加え、例外ケースの分析では選択されていない児童による返答は質問と応答の連鎖から削除されるということが示され、それによりこの種の教育現場においては「選択された者が応答する」という優先性が重視されることが更に立証された。相互行為参加者のこのような行

為や志向はこの特定の社会組織を象徴しているとも言えよう。

以上のように、日常会話と語学教室相互行為では質問と応答に関わる2つの優先組織のバランスということについて違いがあることがわかった。日常会話では、応答者として選択された者が答えることができない際には他の会話参加者が公に応答することがあるように、「会話の前進」を「選択された者による応答」よりも優先させることがある。これに対して、語学教室における相互行為では、返答するように選択された者がすぐに答えない時には他の相互行為参加者が答を言うことはあってもその答は質問者でなく返答するように選択された児童にささやく、というオフレコの形をとることにより、「選択された者による応答」への志向を強く示すことがわかった。

この規範は児童が英語を初めて習い始めた場合でも、すでに数学期学んでいる場合でも同様であった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

(1) Hosoda, Y., & Aline, D. (2010). Learning to be a teacher: Development of EFL teacher trainee interactional practices. *JALT Journal*, 32, 119-147. (査読有)

[学会発表] (計5件)

(1) Hosoda, Y. Learning to use directives through classroom interaction. Paper presented at 18th Pragmatics and Language Learning Conference, Kobe University (神戸大学).2010年7月26日(査読有)

(2) Aline, D. Development of teacher trainee assessments in the classroom. Paper presented at 18th Pragmatics and Language Learning

Conference, Kobe University (神戸大学).2010年7月26日(査読有)

(3) Hosoda, Y., & Aline, D. Assisting Peers: Preference for Selected Speaker Response in Language Classrooms. Paper presented at Japanese Society for Language Sciences 12th Conference (言語科学会第12回年次大会), The University of Electro-communications (東京電気通信大学). 2010年6月26日 (査読有)

(5) Hosoda, Y. & Aline, D. English Activities Supporters: Longitudinal Development of Interactional Practices. Paper presented at JALT Yokohama, Kanagawa University (神奈川大学). 2009年10月18日(査読無)

(4)Aline, D. & Hosoda, Y. Development of EFL teacher trainee classroom interactional practices: A longitudinal study. Paper presented at International Pragmatics Association 11th Conference, Melbourne, Australia. 2009年7月13日(査読有)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

細田 由利 (HOSODA YURI)
神奈川大学・外国語学部・准教授
研究者番号：70349124

(2) 研究分担者

デビッド・アリン (David Aline)
神奈川大学・外国語学部・教授
研究者番号：70289958

(3) 連携研究者

()

研究者番号：